芸能界インサイド・ストーリー

艶歌よ！ふたたび

大下　英治

芸能界インサイド・ストーリー

艶歌よ！ふたたび

大下 英治

艶歌よ！　ふたたび
著者―大下英治　発行者―井上功夫
発行所―株式会社双葉社　東京都新宿区東五軒町三―二八　郵便番号一六二
電話東京（〇三）五二六一―四八一八（営業）
（〇三）五二六一―四八三三（編集）
振替東京八―一一七二九九
印刷所　三晃印刷株式会社　製本所　株式会社若林製本工場
落丁乱丁の場合は本社にてお取りかえします。
定価・発行日はカバーに表示してあります。
©大下英治　一九九三年　Printed in Japan

ISBN4-575-23171-1 C0093

艶歌よ！　ふたたび

装画　堂昌一
装幀　バンケット

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

水原弘が呼ぶ

「いまにも、涙雨が降りそうじゃねえか……」

紅プロ社長の岩倉大造は、日比谷通りをわたり、芝増上寺の三解脱門をくぐろうとした。このとき、背後から聞きおぼえのある声がひびいた。

ふりかえると、『週刊タイム』の記者深井武四郎が大股で近づいてきた。

相変わらず青白い不健康な顔色をしている。黒の喪服を着ているので、よけいに青白さが目立つ。痩せているうえ、脚も細くひょろ長いので、まるで烏のように不吉に映る。

ふたりは、そろって三解脱門をくぐった。

この夜――平成四年六月十二日、増上寺会館二階で作曲家中村八大の通夜がいとなまれていた。

深井とは対照的にでっぷり太っている岩倉は、額から吹き出る汗をハンカチで拭いながら話しかけた。

「おい、気をつけなよ。おめえさんの顔色は、死ぬ前のおミズにそっくりになってきたぜ」

おミズ――中村八大作曲、永六輔作詞の『黒い花びら』で第一回「レコード大賞」を受賞した水原弘のことであった。

じつは、岩倉と深井のふたりをむすびつけるきっかけになったのが、水原弘であった。

岩倉は、あらためて深井の横顔に眼をやりながらいった。

「おミズの顔色は、青白さを通りこして、死ぬ前は、どす黒かった。ゴルフでもして日焼けしたのかい、とよく訊かれたほどだった。肝臓が、メタメタにやられていたのさ。おめえさんも、人間ドックに入って肝臓のチェックをするんだな」

深井は、にやりとした。相変わらずゾッとするほどのニヒルな笑いであった。

「いまさら肝臓の検査をして、医者から酒をやめろといわれたって、やめる気はねぇよ。長く生きて、別にやりてぇこともあるわけじゃなし。あとに残す子供も、いるわけじゃなし。始末しそこなった女が何人かいねぇわけでもねぇが、その女たちだって、

おれの死を泣くのは、せいぜい三ヵ月さ。泣き終わると、また新しい男の胸元でよろこびの声をあげるさ……」
「せっかくトップ屋稼業で長年仕込んだネタが、しこたまあるんだろ。それを小説にしたい、というせめてもの野心はないのかい」
「ないね」
深井は、ためらうことなく、吐き捨てるようにいった。
「いい年をして、おれがいつまでもトップ屋をやっているのは、その週その週の事件を獣のように本能的に追い、次の週は、前の週の事件のことなどすっかり忘れ、また新しい事件を追っているのが好きだからさ。おれが興味あるのは、眼の前にある現実だけさ。実人生そのものに、興味がある。そのおれが、昔追ったものを、いまになって小説に仕立てようなんてセンチメンタリズムは、まったく持ち合わせていないね」
「そういいつつ、こうして通夜に律儀に顔を出している。おめえさんらしいや」
「いや、おれは情のために、ここに来たんじゃない。じつは、中村八大とは面識はないんだ。それなのに、なぜか、こうして足を運んでいる。おおかたおミズが呼んだんだろうさ」
岩倉は、夜空をふりあおいだ。星ひとつない漆黒の空が薄気味悪くひろがっている。
岩倉は、足を止め、つぶやいた。
「おミズか。やつの生き方そのものが、艶歌だったな……」
ふたりは、増上寺会館に急いだ。

◉

岩倉と深井は、増上寺会館に入った。読経が、流れている。白い菊をはじめとする献花に包まれ、黒縁の額の中で、中村八大が笑っている。永六輔、星野哲郎、猪俣公章らの献花がならんでいる。
岩倉は、遺影の前に足を運んだ。焼香しながら、中村八大に呼びかけた。
〈八大さん、あなたのメロディーは、二十年前、じつに新しいメロディーだった。艶歌が日本人に訴えかけてくる美学とは、ひと味ちがっていた。西洋的

というか、軽いタッチの曲をつくり出してみせた。いまの艶歌の作曲家たちは、艶歌というものはこういうものだ、ひとつの形式があるものだ、と思いこんでいる。そうしてどんどん艶歌を狭い枠に閉じこめてしまっている。第二、第三の中村八大が出て枠をとりはずさなければ、艶歌もよみがえらない……〉

中村八大は、永六輔とのコンビで、『黒い花びら』を爆発的にヒットさせたあと、やはり永とのコンビで梓みちよの歌った『こんにちは赤ちゃん』、やはり永とのコンビで坂本九が歌った『上を向いて歩こう』を作曲した。その間、北島三郎のポップス調艶歌『帰ろかな』も作曲している。

岩倉は、焼香をすませ、遺影に手を合わせた。

〈安らかにお眠り下さい、あなたのお役目は終わりました、といいたいところだが、第二、第三の中村八大が出てこない。もっと生きて、活躍してほしかった……〉

岩倉は、深井と増上寺会館を出た。

いつもはパーティー会場でふたりで顔を合わせても、いっしょに酒を飲むことなどなかった。が、この夜は、深井と無性に飲みたかった。

〈これも、おミズのせいか……〉

深井も、おそらく、おなじ気持ちなのだろう。岩倉が日比谷通りに出て手を上げタクシーを停めると、なにもいわず乗りこんできた。岩倉は、運転手にいった。

「赤坂の乃木坂まで」

この夜だけは、深井とふたりで、有線から流れてくる水原弘の歌をしんみりと聞きたかったのである。

岩倉は、水原のデビューのときからのマネージャーであった。

水原が、『黒い花びら』で〝黒いブーム〟を巻きおこしたのは、昭和三十四年であった。その年のNHKの「紅白歌合戦」にも出場した。映画に舞台に、引っぱりダコとなった。

水原は、有頂天になった。撮影所や劇場の若い裏方たちを、ずらり引き連れ、飲み歩いた。

岩倉は、水原に忠告した。

「歌手は、浮き沈みが激しい。沈んだときに乗りきるためにも、稼げるときは、たくわえておいたほうが……」

水原に、いきなりぶんなぐられた。前歯が二本、折れて飛んだ。

「馬鹿野郎！　艶歌の歌手ってのは、読んで字のとおり、てめえの生き方に艶がなくては駄目なのさ。それを、サラリーマンのようにチビチビ金を貯めるようなケツの穴の小せえことをしていちゃ、艶も花もあるもんか。黒い花びらが、黒いしおれ花になっちまうぜ！」

岩倉は、それからというもの、二度と水原に忠告はしなかった。

岩倉が心配したとおり、その後、水原にヒット曲が出なくなった。人気は下がるいっぽうであった。おまけに、昭和三十八年、水原は、「演技の勉強」と称して、横浜市綱島温泉の賭場に出入りしていて、当局の調べを受けた。常習と目されてマスコミに公表され、歌謡界を追放された。岩倉は、それでも水原から離れなかった。岩倉は、信じていた。

〈水原は、かならずやカムバックする。艶歌を歌うためにこの世に生まれてきたような男だ。カムバックを見とどけるまで、おれはいつまでもついていく〉

が、水原は、仕事がまったくないのに、全盛期とかわらぬ豪遊をつづけた。銀座、赤坂の高級バーを、連日飲み歩いた。

「人に奢ってもらう酒は、飲まねぇ」

水原の持論であった。目上の人と飲むときぐらい勘定を出してもらえばいいのに、自分で奢った。

寂しがり屋で、まわりにいつも人がいないといやがった。やたら取り巻きを連れて飲み歩いた。街を歩いていて、「オッ、おんたい！」と声をかけられると、もううれしくなる。「よし、ついてこい！」と、見ず知らずの連中にまで奢ってしまう。しかも、酒はレミーマルタンと決まっていた。一晩で、六十万円も使った。その当時の六十万円は、いまの約五百四十万円にあたる。兄貴と慕っていた勝新太郎の影響もあり、突っ張りつづけた。

それがまわりから愛される一面でもあったが、そ

ばについている岩倉の胃は、キリキリと痛んだ。
こともあろうに、当時有名だった雪之丞というオカマらを連れて、ヨーロッパ旅行に行ったこともある。オカマを連れて旦那顔をしてあそぶのが粋だ、と思いこんでいたのである。
その金の都合をつけるために走りまわるのが、岩倉の役目であった。
岩倉は、新宿の暴力団の幹部に頼みこみ、一千万円も借りた。十日旅行すると、利子だけで百万円もついた。借金は、雪ダルマのように増えていった。
「兄貴、いいかげんにしてもらいたい……」
喉までその言葉が出かかった。が、口に出せば、また歯を折られるほど殴られるに決まっている。ぐっと堪えた。岩倉は、水原のそばにいて辛抱しながら、夢だけは捨てなかった。
〈兄貴を、ふたたび紅白に……〉

◉

昭和四十一年の春、水原の運のひらけるときがやってきた。岩倉は、水原といっしょに、長良じゅん（現・廣済堂プロダクション社長）と会った。長良は当時、木倉事務所に勤めていた。
水原は、銀座のバーで、長良に訴えた。
「もう一回、紅白に出たい。おれといっしょに、組まないか」
長良も、乗った。
「おれは、おまえの歌唱力を高く買っている。もっと自分をたいせつにしてくれたら、世界的タレントになれる要素がある」
水原は、長良と固い握手を交わした。岩倉は、そばで見ていて、さけび出したいほどうれしかった。
〈これで、兄貴は、カムバックできる！〉
長良は、水原に訊いた。
「ところで、いくらあれば、おまえの借金のカタがつくんだ」
「二千万円あれば、すべてカタがつきます」
岩倉は、冷汗が出た。水原には、じつは八千万円もの借金があることを知っていた。あきらかに、長良を騙すことになる。しかし、いま本当のことを打ち明ければ、長良も手を引くことは眼に見えている。水原ともども、長良に嘘を通すことにした。

長良は、友人や知人から二千万円の金を借り、水原の借金に充てた。木倉事務所から独立し、長良事務所を設立。水原のカムバックに賭けた。

その間も、水原の借金はふくらんでいた。八千万円のうち六千万円が残っていたのだから、無理もない。しかも、その利子は、十日で一割、いわゆるトイチは序の口で、三日に一割というものまであった。

岩倉は、水原に忠告した。

「このまま長良社長に隠しているより、正直にいった方がいいんじゃないですか」

「わかった。しかし、八千万円もあった、とはいえない。その半分の四千万円あった、といおう……」

水原は、長良社長に、じつは借金が四千万円あった、と打ち明けた。

長良社長は、泣くに泣けなかった。頭を抱えこんだ。

「わかった。金の工面はする。なんとしても、カムバックさせてみせる」

長良社長は、それから懸命に金をかき集め、借金のカタをつけた。

いよいよ、水原のカムバックのときがきた。

川内康範が作詞、猪俣公章が作曲した『君こそわが命』を、東芝レコードで出すことに決まった。

岩倉には、レコード吹き込みのときの水原の真剣さが、いまだに忘れられない。

いや、水原だけではなかった。吹き込みに立ち合った川内康範、猪俣公章、長良社長、東芝レコード文芸部長であった浅輪真太郎も、そろって、異様な熱の入れようであった。

マイクの前に立った水原は、初めのうちは背広を着て歌っていた。

浅輪部長も、川内康範も、厳しかった。

「おミズ、そんな声の出し方では、駄目だ！」

何回も、駄目を押した。水原は、そのたびに必死で歌った。

そのうち、暑さと興奮とで、背広を脱いだ。シャツも脱いだ。ついには、肌着も脱いで歌いつづけた。

最後には、とうとうパンツ一枚になった。汗びっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しょりで、ボタボタと汗が流れていた。
水原は、必死で歌った。

あなたをほんとは　さがしてた
汚れ汚れて傷ついて
死ぬまで逢えぬと思っていたが
けれどもようやく虹を見た
あなたのひとみに　虹を見た
君こそ命　君こそ命　わが命

川内が、うれしそうに声をかけた。
「おミズ、よし、それだ、それだ！」
岩倉は、あまりのうれしさに涙があふれ出た。
〈兄貴……〉
昭和四十二年、水原は、この『君こそわが命』で、歌の文句どおり、ふたたび虹を見ることができたのであった。
爆発的人気を呼び、四十二年レコード大賞歌唱賞も獲得した。
岩倉は、そのあと、水原になお大きな地獄が待ち受けていようとは思いもしなかった……。
タクシーは、赤坂の乃木神社下に着いた。岩倉は、深井とタクシーを降りた。
右手に、スナック「北の華」のネオンが浮かびあがっている。長年流しをやっていたがカラオケブームで仕事がめっきり減り、スナック経営に転じたマスターのやっている店であった。この店は、有線だけで、カラオケは置いていなかった。リクエストすれば、水原弘の歌を、しんみりと聴くことができる。
岩倉は、店のドアを開け、深井をともない足を踏み入れた。

運命のひとこと

カウンターの中から、しんみりとした声がかかった。
「岩さん、中村先生も、逝っちまって、どんどん寂しくなるねぇ……」
下がり目のいつもは愛嬌のあるマスターの顔が、

この夜は、ひどく哀しそうであった。
「艶歌を輝かしてくれた星が消えるたびに、艶歌の世界がまた暗くなるのさ」
岩倉がいうと、深井が、皮肉っぽい口調でいった。
「かくして、艶歌の世界は、やがて星ひとつない漆黒の闇になるのさ…」
岩倉と深井は、カウンターに腰を下ろした。
岩倉が、マスターに頼んだ。
「水原の『黒い花びら』を、有線で流してくれ」
マスターが、ふたりへの水をカウンターに置きながらいった。
「いま、頼んだところですよ」
かつて流しをしていたマスターは、口数は少ないが、岩倉の気持ちはお見通しのようであった。
岩倉は、泡盛のロックを頼み、深井は、バーボンウィスキーのロックを頼んだ。それから数分して、中村八大作曲、永六輔作詞の『黒い花びら』が流れてきた。

黒い花びら　静かに散った
あの人は帰らぬ　遠い夢
俺は知ってる　恋の悲しさ
　　恋の苦しさ
だから　だから　もう恋なんか
したくない　したくないのさ

岩倉が、泡盛のロックを飲み、いった。
「あらためて、惚れなおすねぇ、水原に。当時は低音の魅力といわれたけど、いま聴くと、けっこう高い声だね。なにより、艶がある。男の色気がある」
深井が、遠い過去をふりかえるような眼になった。
「岩倉さんとおれとを会わせたのも、おミズだったな……」
深井は『週刊タイム』の特集記事の取材で、水原弘が借金地獄でのたうつさまを追った。
その取材で、水原の再起に賭け『君こそ我が命』で水原をよみがえらせた長良じゅん社長すら、さすがに匙を投げたことがわかった。

深井は、その取材で、水原のマネージャーをしていた岩倉に初めて会ったのである。

岩倉は、取材には応じたくなかったが、「真相は、長良社長が知っているから」と、長良社長に会わせてくれた。

長良社長は、包み隠さず、内情を打ち明けてくれた。

「昭和四十九年八月十五日、『第一興業』の谷弘代表が、おれの事務所に、突然、乗りこんできた。かれは、『芸能人専門金融』を看板にしていた。おれは、かれの出してきた条件を見て、わが眼を疑ったね。なんと、水原弘の営業権の譲渡なんだ。一千万円の借金のカタに、テレビ、キャバレーなどの興行の営業権利を譲渡する、というものなんだ。一回四十万円で、二十五回分を興行で返済すると書かれている。しかも、本人のサインだけでなく、奥さんのサインまである」

深井も、芸能界の事情はよく知っていた。長良社長の驚愕ぶりは、よくわかった。可能なかぎりの金をかき集めて水原を再起させたというのに、この仕打ちである。

長良社長は、語りつづけた。

「いや、おどろいたよ。水原に電話して確認したところ『その金がなくては、どうしようもないんだ』と懇願する。おれは、それまで水原のどん底からいっしょに努力してきたというのに、泣くに泣けぬ気持ちだった。その念書は、夫婦でいう離縁状のようなものですからね。ここまでくれば、仕方ない、と思いましたね。せっかくおれが取った仕事が谷さんの方へまわるんでは、仕事になりませんもの」

水原は、借金のために、ついに「第一興業」に身を売ったわけである。

◉

深井は、岩倉にいった。

「本当に、惜しい歌手だったな。もっと上手に使ってやれば、声の調子も保て、新しい傑作も生まれたろうに……」

水原は借金地獄の中であえぎ続け、無理と屈辱のスケジュールを余儀なくされ、レミーマルタンで憂さを晴らし、ついに昭和五十二年二月にダウン、再

起不能といわれた。
慶応病院院長も、水原を診察し、「このままでいたら、一年以内に死んでしまう」と忠告した。
が、水原は、借金地獄のため、月十回の興行をせざるをえなかったのである。
深井は、岩倉にいった。
「おれがおミズに取材で会ったのは、昭和五十二年の秋だったな」
「十月十五日さ。おれも同席していたから、はっきりとおぼえている。紀尾井町のホテル・ニューオータニでタワー四階のポリネシア料理レストラン『トレーダービックス』だった」
「おれは、おミズの顔を見るなり、どきりとしたよ。生きた人間の顔色じゃなかった。眼の白眼の部分がまっ黄色で、黄疸が出て、顔は土気色」
「水原は、アルコールは禁じられているのに、飲まなきゃサマにならないと考えたんだろう。おれが止めるのもきかず『いいって、ことよ』と意気がり、ワインの白を飲みながら話したな」
「話の内容は、威勢のいいものだったな……。『借金？　もうほぼカタがついたね。しかし、おれはひどい金を借りてきたもんだよ。これまでイチイチなんて金借りたからね。トイチじゃない、イチイチだぜ。競馬場へ行って、その場で百万円借りるんだ。外れると倍返し、万が一馬券が当たれば、というヤケクソの期待で借りたのさ』おミズは、胸を張っていったよ。『近いうち、かならず再起してみせるぜ。それも、日本でじゃない。アメリカのカーネギーホールでチャリティショーを華々しくやるんだ。アメリカで売れると、日本の連中ははじめて見なおす。それに成功すれば、おれは、日本に逆上陸する。再起できる。いまの借金なんて、すぐにでも返せるぜ』しかし、アメリカでショーをやるには、また金がいる。『スポンサーはいる。半年後のおれを、みててくれ』おミズは、いま一度椅子から身を起こし、胸を張ってみせた。哀しい突っ張りだったな」
「それがまた、水原らしかった」
「あのとき、そのスポンサーはだれだといって、おれが質問した。おミズは、『６６』とまるで暗号の

ように数字でいった。おれは、右翼の大立物の児玉誉士夫が、たしかそのとき六十六歳と知っていたから、児玉誉士夫ですか、と訊いた。おミズは、曖昧に笑って『ま、いいってことよ』とごまかした。アメリカでのショーのスポンサーは、児玉だったのか」

「そのことについては、水原は、おれにも、ついに打ち明けなかった。水原の再再起に賭ける第二の長良が、ついにあらわれなかったことだけは、たしかさ」

深井は、水原のいったことをふいにおもい出し、おもい出し笑いをした。

岩倉が、訊いた。

「なんだい、気味の悪い」

「おミズが、後輩の森進一について、おもしろいことをいったのをおもい出したのさ。『おれが、赤坂の料亭で飲んでると、隣の部屋が騒がしい。こういうところでえらくガキっぽい騒ぎ方をしてるが、だれだい、って芸者に訊くと、森進一だという。野郎！　こういうところでの遊び方を知らねぇな、とやつのいる部屋まで行った。手で襖を開けるのも癪だ。足で開けて、座敷に入った。おどろいた顔をしている森進一に、いってやったのよ。〝てめぇのようなガキは、こんなところに来ねぇで、六本木の喫茶店〈アマンド〉へでも行って、フルーツポンチでも食ってな〟そういって、森を追い出しちまったよ』ってね」

岩倉も、笑った。

「水原の、稚気愛すべき一面だったな」

「取材は、午後三時ごろからはじめたんだが、話がすすむにつれ、窓の外は、たそがれはじめた。水原の顔色は、ますます悪くなり、たそがれの色そのものになっていった。体がだるくてたまらないらしく、椅子にもたれかかるようにして話しつづけた。それでいて、相変わらず威勢だけはよかったね。おれに、真顔で訊くんだ。『いまの歌手の中で、うまいと思う歌手が、いるかい』おれは、五木ひろしの名をあげた。やつの股旅艶歌が好きだったからね。すると、おミズは、キッとなったね。『五木ひろし？　やつは……』おミズは、自分の喉を指差し

て、吐き捨てるようにいったよ。『ここでしか、歌ってねぇからな。おれは……』おミズは、胸をドンと威勢よく叩いていったものさ。『おれは、ここで歌ってる。心で歌ってこそ、艶歌ってものさ……』その一瞬、おれの眼には、おミズの土気色の顔に血の気が差したように映ったよ」

岩倉が、胸を熱くさせた。

「水原らしいことを、いうよなぁ……」

「おミズらしいといえば……」

深井はバーボンウィスキー、ワイルド・ターキーのロックをぐいとあおり、いった。

「取材を終え、おれは会計の窓口へ向かった。と、おミズはおれを呼び止めていう。『会計は、おれがすますから……』おれは、取材を申し込んだおれが払うのが筋だから、といった。すると、おミズは、親指で自分の顔を指していったよ。『よしなよ。そんな真似してると、いまにおれのようになっちまうぜ』そのときのにやりとしたおミズの人懐っこそうな顔が、いまも眼について離れないぜ」

岩倉も、とたんに感傷的になった。涙声になった。

「そうかい。そんなことがあったのかい。そのときおれはまだ座席にいたから、そいつは知らなかった。いかにも、水原らしいよな……」

◉

「それから一年もたたないうちに、おミズは、ついに興行の旅先で、死んじまった」

「おれも、マネージャーとして、最後まで水原のそばについていながら、興行で歌うことをやめさせることができなかった……」

「岩倉さんが、自分を責めることはないさ。借金の火ダルマは、だれも消せなかった。おミズの自業自得さ。ただ、ああいうおミズだったからこそ、あんなに心の奥までしみわたる歌が歌えたのさ」

「それにしても……」

岩倉は、泣いていた。

深井は、しんみりとした口調で話しつづけた。

「おれは、結局、おミズの死亡記事も書くはめになっちまった」

水原は、昭和五十三年七月五日に死んだ。享年四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.